
地域の支えを受けながら要介護で在宅血液透析(HHD)を実現した症例について

医療法人衆和会 長崎腎病院

○藤原久子 林田めぐみ 久原拓哉 河津多代 澤瀬健次 橋口純一郎 原健二 原田孝司 船越 哲

【はじめに】

超高齢化社会である本邦においては、要介護認定患者の選択肢の一つとしてHHDが検討される場合も予測される。

【症例】

(1) 65歳男性、右大腿切断術後。自宅までは150段の階段があったものの、患者家族と共にHHDを希望した。そこで院外の社会資源にも協力を仰ぎ、HHD導入及び退院にむけて支援を行った。(2) 71歳女性、右大腿骨折術後、右腸筋膿瘍治療後。患者。家族ともにHHDの強い希望があり同様に院外の社会資源にも協力を求めた。

【結果】

2症例とも、HHDの意志決定から約3か月で指導は終了し、退院となった。1症例目は下肢切断術後の幻肢痛が、HHDの教育を開始してからは著明に軽減していったとの事であった。2症例目はHHD指導を受ける中で喪失した自信を徐々に取り戻し気持ちが明るくなった。

【考察】

これまでHHDは患者、家族、病院の三者がおおよそのイメージであったが、加えて地域の社会資源との連携が必要不可欠と考える。